川から街をつくる?

(株)日水コン　建築事業部第１部　地域計画課長
（元研究第一部主任研究員）　高橋邦夫

1. はじめに

隅田川の川下りの船からみる沿川の風景は、特殊堤にさえぎられて見え隠れする低層家屋、乱立する高層アパート群、幾本もの排水口が突き出た老朽化した工場群、そして突如として現出する都市再開発整備地区及びその建設現場など総じて無秩序、無軌条なその沿川風景は、一方で時間の推移と共にたえず新陳代謝を繰り返し、一時たりとも止まることはない。

都市の歴史は、人類の都市建設におけるたゆみない実験の蓄積というべきものであり、そこには人間の理想の生活環境を求めるはげしい憧憬と期待、そして混沌の中で挫折が交錯し、また人間の都市の建設と運営に関する英知と知恵が込められている。

とはいえ、先述した持続性のない都市景観は総じて日本共通にみられる現象であり、時間の推移の中で記憶喪失症とすらいえよう。常に新陳代謝を重ねる都市の究極の姿、臨界状態は有り得るのか、また有り得るべきなのか否か。

こうした設問に対し、一つの事実として欧州諸国にみられる伝統的建造物街並みの復元保存が挙げられる。ことに第二次世界大戦において壊滅的な被害を被ったドイツ、ポーランド等の諸国においては、瓦礫の破片を一つ一つ拾い集め、それらを忠実な形に復元している。

より機能的で経済的な手段をあえて取らず、非効率的な中世の町並みを何故復元しなければならないのか。

気候風土、歴史、文化、宗教、民族性、産物など様々な要因の絡みの中で総合的に論じられるべきで在ろうが、いずれにしても写真等で眺める建造物、及びそれらで構成される街並みは、風格があり秩序だった調和のある景観を現出している。

川から街をつくる、水辺と町の一体化など、街づくりの一環としての水辺空間を位置付けることはたやすい。しかしそれが街づくりにどの様な波及効果をもたらすのか、川と街との相補的な在りかたはどのようにあるべきなのか。

2. バイエルン地方で

『川から街をつくる』という訳のわかったようなわからんような遠大なテーマを掲げ、８日間主としてバイエルン地方を彷徨した。

主たる訪問地としてミュンヘン、アウグスブルク、ウルム、バンベルグ、ザルツブルク、マンハイムなどとなるが、総体としていえることは街並み、さらに沿川の街並みの美しさであろう。

美しさを構成する基本的な要素としてまず気候風土が挙

バンベルク市　旧市街とレグニッツ河

げられよう。

降雨特性、気温分布、地形、土壌の差異は、例えばモンスーン気候の我が国とは異なり植生、土地利用を規定する。一面の緩やかな洪積台地に広がる麦、葡萄、牧草を主とした耕作地は下草の生えにくい気象特性を自然に生かした形態といえよう。そしてそこを流れる河川は洪積台地の縫って流下する掘り込み河道を主としていることである。そして川はこうした街の外堀として、あるいは水上交通の水路として存在し、我が国とはオーダーの異なる流況係数の差異は現在においてもその機能を失うことなく維持されている。

つぎに、空間のひろさが挙げられよう。

ドイツ（統一後）と日本の国土面積はほぼ同等。しかしながらそこに占める可住、可耕面積は一人当たりおおよそ6倍の差異があることである。

さらに街の形成過程である。

こうした国土において街、耕作地は台地の上に構成され、ローマ帝国の植民地を雛形として形成され、発展してきた。民族移動、キリスト教の普及、宗教改革、市民革命、絶え間ない戦争は、DOMを中心とした外敵からの防御都市として都市機能をコンパクトに集約させ拡大してきた。

この結果、街の中心部は必然的に高層化し、かつ整形化されてきたものと思われる。限られた空間の中で外敵からの防御を制約条件とした街の形成という視点でとらえることは自然であろう。また構造様式が壁構造であることも街の整形化に大きく寄与していよう。柱・梁の構造様式は継ぎ足し可能な様式である。一方は予め割り当てられた空間の中での秩序ある計画的な配置とならざるを得ない。

そして重要なことは美しさを維持するには何等かの秩序が必要となることである。

絶え間ない戦争はルールを必要とする。平和民族にルールはいらない。権利・義務の契約化。私権・公権の使い分け。自治、市民意識等うがった言い方をすれば戦争の賜物といえる。またバイエルン州に限らず大陸には国際河川が多い。こうしたことから、水量・水質に関する何等かの取決めは必然となる。課徴金制度はヨーロッパにおいて出現した。

相互理解は、違いを明らかにする、認識することから始まるとはいえ気候風土、広さ、街の形成過程、そして秩序など我が国との差異を考えた時妬ましさを覚えるのは素直な感覚であろう。しかし羨んでも仕方のないことである。それでは何ができるのか。

日本の川、沿川の街それぞれにそれらしさがある。外国の姿に範を取ることの前にそれらしさを追求すること、分析することである。手掛かりは身近なところにある。

ドナウ河　ウルム市

ドナウ河　ドナウヴェルス市